

安部先生は

兼子イズムの実践者

栗原 稔

ここに、一卷の奉書に墨で丹精こめてかかれた「表彰状」がある。

「君ハ昭和十年四月本校ニ入学以来、枝郷ノ自宅カラ往復六里、嶮路ヲ雨ノ朝風ノ夕ヲ意トセズ、五ケ年ノ間一日ノ欠席モナク、月ヲ踏ミテ出デ星ヲ戴イテ帰り、寒稽古ノ際ノ如キハ午前二時ニ家ヲ出テ、寒風霜雪ヲ踏ミテ皆勤シ、学校ニ在リテハ或ハ毎年副級長トシテ其ノ重責ヲ果シ、或ハ学校代表トシテ御親閲ヲ拝受シ、或ハ国防競技マラソン競走選手トシテ活躍シ又余暇ヲ以テ或ハ荒地ヲ開墾シテ果樹ヲ植エ、或ハ花卉蔬菜ヲ栽培シテ通学ノ途中之ヲ市ニヒサギ、或ハ幾度カノ失敗ニモ屈セズシテ寒冷地ニ於ケル温床ノ育苗ニ成功シ、或ハ優良種苗ヲ隣保ニ頒チテ地方農事ノ改良ニ努メ、或ハ兄ノ出征後ニ於ケル家業ヲ助ケ、又常ニ

学用品等ノ費用ヲ節約シ一面勤勞ニヨリテ得タル所ヲ貯蓄シ勤儉力行ニコレ努メ、既ニ二百五十余圓ノ貯金ヲ為シ……」

この表彰状を自ら認（したため）て授与したのは、言うまでもなく元別府中学校兼子校長。受けたのは安部巖先生（三回生・郷土史家・元小学校長）。

今では知る人もしだいに減りつつあるが、安部先生の有名な枝郷からの五年間皆勤に対する表彰である。

安部先生は毎日、朝五時に枝郷の自宅を出て、今のリング園から竹の脇・櫛下・六枚屏風と山を越えて朝見神社のところへ着く。ここから、さらに西小学校の下を横に進み、宮地獄神社へ。

昔は、ここからまっすぐ別府中学の正門に通じる林の路があったが、これを抜けて学校に到着した。実に六里（二四キロ）の道程。先生は時には、自ら朝ご飯を炊いた。表彰状にも書かれているように、野菜を市場に卸し登校もした。西校の近くにたどりついた所で、地下タビから革グツにはきかえたそうである。

首藤成男先生の言を借りると、「安部巖先生は兼子校

長の教えを最も忠実に実践した人の一人」である。前にも書いたように、兼子校長は「郷土教育が教育の原点」と郷土の偉人を探究することを力説した。安部先生は教育者として、郷土史家として、その「兼子イズム」を守ってきた第一人者なのである。

「兼子先生は知識習得だけでなく『生きるためのワザ



▲別府中学校在学中の顕著な実績を詳らかに讃えた異例の表彰状 (昭和15年3月3日付 兼子鎮雄校長自署)



▲『別府温泉湯治場大事典』出版(1987年)に際し、NHK 柴田アナウンサーと共に、平松県知事を訪問中の安部巖先生

した」と安部先生は語っていた。また、郷土史家、そして敬神家として「奉安殿の基礎に生徒が字を書いて敷いた石が埋まっているはず」とも語っていた。表彰状は表装してキリ箱に保管されている。先生の宝物だ。

(おわり)

もだいじだよ」と生徒たちに園芸を教え、開墾を実践させた。宮崎高等農林卒の原重義先生は堆肥の研究をされていました。私は先生の授業がとも楽しみでも